

逢故國春雨

故國の春雨に逢ふ

二元韻

征旅三年憶故園
 歸帆飛棹蹴濤奔
 投錨愁看燒夷跡
 細雨如清日本坤

征旅 三年 故園を憶ひしが
 歸帆 飛棹 濤を蹴りてはしる
 投錨し 燒夷の跡を愁ひみれば
 細雨 日本のつちを清むるが如し

語注

故園 故郷
坤 大地

歸帆 歸りの船

飛棹 船の速度を速むること

歸還の爲の移動命令の出でぬ。検査済みし順に乗船す。早く著けば早く歸れるとて、歸心矢の如く、夜を徹して五十キロの道を急ぎぬ。軍服は敗戦前に補給ありしも、冬着との交換なかりし故、遅れなば作戦にて破れしままの襪褌着にて復員となりしやも知れざりき。他に毛布と下着、定量の外に月末分まで支給されるし爲に剩りしを加へし米三升、砂糖、蠟燭、更に罐詰、乾麵麩等を詰めし背嚢を背負ひぬ。内地は燒野原なればかかる物を持たざれば困るべし。作戦間とは異なりて重量も氣にならず、落伍者もなく、翌朝九時に上海の兵站宿舎に到着せり。舊十三軍司令部に星條旗の上れるを見て敗戦を痛感しぬ。

諸検査を終へ、乗船を待つ爲の建物に移りぬ。米上陸艇LSTは明日か明後日に出發、二日後に博多に上陸と聞きしに、翌翌日になるも乗船とならず。情報屋間回りて、米兵の休暇にて船は動かずと判明しぬ。偶、舊日本海軍の船入港しるて、歸路に大隊の一部を運ぶとなりぬ。元兵室らしき部屋に入れられしが、LSTにあらで昔の軍艦たりし故なるか、日本に歸りし如く安堵しぬ。中學の後輩航海士として乗船しをり、勧めらるるままウイスキーの度を過ぐして將校寢臺にて寝ねぬ。

醒めしは入港寸前なりき。甲板に上れば下船準備を整へしが集りぬ。瓦礫の中に、直徑一メートルもありしかと見ゆる煉瓦造の大煙突が七、八メートルの高さにて折れしまま突立ちぬ。その向う一面に燒野原の廣がり、都會らしき活氣も、人の生活のあるべう匂も感じざりき。想像を絶する破壊の前に聲を呑みしが、此の光景を眺むるにつけ大阪は如何と心配になりぬ。

船から降りて整列させられ、無機物の如き扱ひにて首筋より蝨退治の藥品なるDDTを振掛けられたり。